

●国土交通省淀川河川事務所の木津川土砂部会が16日開かれる。

第7回目の会議が開催され、15kmに設置した竹蛇籠の効果や中聖牛の果たす役割が報告され、引き続き今年度に4群目3基の中聖牛の設置方針が示されました。そしてその効果をもとに20km付近の護岸に役立てる方針が示されました。

●イタセンバラの復活を目指す第一回準備会

京田辺市立中部住民センターで開かれ、21人が出席しました。深田三郎理事長の開会挨拶に引き続き山村武正常務理事から会議の問題提起があり、小川力也本会顧問から天然記念物イタセンバラの生態スライドの説明、河合典彦先生から大阪での取り組みと教訓、竹門康弘先生から中聖牛の役割とその効果についてお話をいただきました。続いて現地視察に移り、山城大橋下流と玉水橋下流の現地ワンドを視察し、センターに戻って自己紹介と課題を整理しました。記録を田中実知世さんにお願ひしましたので、掲載します。出席者19名 竹門康弘 小川力也 河合典彦 石田裕子 中川宗孝 中川幾久夫 福井波恵 大釜智光 田中実知世 北野大輔 深田三郎 大村幸正 太田敏之 金田徹 山村武正 播川司 原英範 長谷川靖 矢放健一。

1. 開会挨拶(深田氏)

2. 問題提議(山村氏) イタセンバラが淀川水系で最後まで生息していたのは山城大橋下流右岸タマリである

90年代、イタセンバラの存在が広く知られることにより盗掘で絶滅した。自身はやましろ里山の会、河川レンジャーで復活の道を探っていた。この度、やましろ里山の会として「トヨタ環境活動助成プログラム」を申請し、全国6団体のうちの1つとして選定され、助成金を受けることとなった。ご参集の皆さんの協力の元、30年計画の第1歩をふみ出せた。

3. 申請内容説明(太田氏) <資料参照> 助成金 トヨタ環境活動助成プログラム・国内小規模プロジェクト 990,000円

4. 小川力也氏 ppt「1990年代の木津川におけるイタセンバラの生息環境と生息状況」にて説明

1990年代、中川宗孝氏の発見で山城大橋ワンドを定点観察

イタセンバラは秋産卵・春泳出。仔魚はドブガイ等のエラの中で越冬 春産卵型タナゴ類から環境順応により進化

90年代、それまでの網状砂州が多かった木津川から、下流淀川の河床低下により木津川がいわゆる「淀川化」しワンド・タマリが増えたことから生息したと考えられる。タナゴ類の生育には仔魚から成魚になる5月から秋までの環境が重要 木津川の課題は、河床低下で水位が下がりタマリが消滅すること、その遷移の速度がはやい事である

玉水橋下流右岸の中聖牛設置場所の下流、90年代当時本流が蛇行していた護岸ブロックが乱積みされた箇所でもイタセンバラを観察している。本流で見たのはこの時だけ。

5. 河合典彦氏 pptにて大阪での取り組みを説明

50年間淀川赤川・城北ワンド周辺でイタセンバラ生息の流れを見て来た 90年代、83年竣工の淀川大堰の影響も有り、ワンドが洪水かく乱の影響を受けなくなってきて、水位変動も少なくなってきた。このころから個体数が減少。2006年から2013年調査ではゼロであった。2013年放流し、その後追加放流なしで7世代存在 イタセンネットの外来魚駆除も一定の効果があった。ワンドでの課題は密漁対策。環境省と旭区が春秋に巡視 ノートリアの貝類食害も深刻

6. 竹門康弘氏 pptにて現在の木津川について説明

玉水橋上流にて竹蛇籠、中聖牛の設置を京大・地域協力のもと実施。伝統的河川工法を用いた木津川の河床地形管理手法に関する研究(①聖牛の製作設置②周辺地形のモニタリング ③周辺の生息生物モニタリング)。河床地形管理とは、土砂供給・流路変動・川幅 ⇄ 河床地形 ⇄ 生態機能

木津川では、短中期的には聖牛設置にて、長期的にはダムからの土砂還元で河床地形管理を目指す。聖牛を設置すると、上下流には土砂がたまり、左右は浸食され一時的タマリ出現。古来よりの河川工法は土砂管理による地形改善=土木工事であった。イタセンバラの生息には裸地砂州ができやすい環境が最適。木津川の河床低下による蛇行の過程で1984~97年の川筋ができ生息条件となった

(現地視察→山城大橋、玉水橋)

7. 自己紹介

8. 現地視察の感想と自由討議

(中川氏) 城陽環境パートナーシップ会議では5月のパードウィークに山城大橋で自然観察会を実施。タマリの観察も可能。

(石田氏) 本取り組みは30年プランの壮大なものである。旭区の先進事例でもわかるように、地元の一般市民の意識を変えて気運を盛り上げることが重要。旭区では区 の魚にイタセンバラが使われており普段から親しまれている。

(小川氏) イタセンバラ復活には密漁対策が大切。玉水のタマリはブロックと国道からの目があることから、適地である。環境も保全されており、現況でもタナゴ類が生息している可能性大(シロヒレタビラ、カネヒラ、タイリクバラタナゴなど)。

9. 今後の取り組み

- ・玉水ワンドの生物調査 2月22日(土)23日(日) 竹門氏・石田氏調整
- ・城北ワンド視察、イタセンパラ見学 4月19日(日) 午前中で調整
(河合氏) 9:30~午前中イタセンネットの外來魚駆除地引網と同定、終了後、大阪府水生生物センターでイタセンパラ見学
- ・玉水ワンド干し上げ→玉水ワンド稚魚調査
(小川氏) 伏流水があり干し上げは不可能だが、稚魚調査で生息生物把握は可能 5月23日(土)・24日(日)で調整

10. 閉会(大村氏) 次回会議は4月で日程調整予定

●炭焼き体験のための試行 25日に実行

3年近く中止していたので、いささか不安がありますが、炭窯小屋に原木が二窯分ありますので、それを使って、あらためて試行することになりました。ご都合がつくようでしたら、ぜひお越しください。1月25日(土)午前9時炭焼き窯小屋に集合で実施いたします。駐車場は路上駐車となりますが可能です。出来るだけ能率よく進行させて、出来れば着火迄行うつもりです。我れと思う人はぜひお越しください。今日ではあまり行われなくなっている貴重な試行です。

●尾根筋ハイキングコースの再整備を行う

21日金田、播川、森島、太田さんの4人が実施、9時半に集合して14時に完了できました。年末にコースのごみ拾いのときに、台風被害で竹や巨木が倒れ込んでいたので、その除去と撤去作業を行いました。樹木がおおよそ30本、孟宗竹も40本を取り除き、コースの目印の布を取り付け完了としました。これでコース明示が回復出来たので、安心して歩いていただけます。

●近畿子ども水辺 1月25日(土)10時 八幡文化センター

河川基金の助成金が打ち切られたので神戸大会以来2年間空白となりました。その間近畿各地から再開の声が上がり、助成金の申請を京都府の数人が届けました。運よく答えていただき1年がかりで再開の運びにこぎつけられました。空白の2年間の影響は大きいもので、今回参加発表してくれたのは申し込み期限で13団体と予想どおりの規模に到達しましたが、年が改まると3団体の欠席が明らかになり、10団体の催しで総勢200人規模になりました。それでも空白の2年間を乗り越えてご参加いただくことは素晴らしいものです。水辺での活動を発表し、質問や疑問に答え学びあいます。午後からはグループでの交流で、10年後の水辺にたいして私たちが出来ることを話し合います、最後にそれを持ち寄って「最初の一步宣言」にまとめます。

大勢の人の前で声を出すのはなかなか苦手ですが、慣れるにしたがって自信がつき力になります。是非一度ご覧ください。素晴らしい成長ぶりが手に取るようにわかります。こうした取り組みを通じて、川を理解していっていただければ大変うれしいです。

●今、絶滅する生物が増えています 過去100年で、地球上の種の絶滅速度が1000倍に

生物の絶滅には様々な原因がありますが、その中でも大きいのが人間の影響です。

国連が2001年~2005年に実施したミレニアム生態系評価では、化石からその当時の絶命のスピードを計算しており、100年間で1万種あたり0.1~1種が絶滅していたとしています。一步法、ここ1000年間で実際に絶滅した種数から計算した絶滅速度は1万種ありおおよそ100万であり、記録されていない生物を含めれば、1000倍以上に上がっているとされています。この100年で起こった顕著な変化と言えば、人間活動の拡大です。生物の絶滅の原因の全てが「人間のせい」とは言えませんが、人間の活動が与える影響がいかに大きいか、私たちは自覚を持たなければなりません。

今も、絶滅危惧種がふえている

環境省が、国内の野生生物について絶滅の恐れを評価した「レッドリスト」で、絶滅の恐れがあるとされた種が増えています。絶滅危惧種(絶滅危惧Ⅰ類(CR, EN)及び絶滅危惧Ⅱ類(VU)の総数は、第3次リスト(2006年~2007年公表)では3155種でしたが、第4次リスト(2012年度公表)では3597種となり、422種増加しました。評価対象の拡大といった事情はありますが、日本の野生生物が置かれている状況は依然として厳しいことが明らかになりました。汽水・淡水魚類の約4割、維管束植物の約4分の1など、絶滅危惧の割合が多い分類群もあります。

(この項：環境省発行の「日本の生き物たち」パンフから抜粋し掲載したもの)